

非対面書道授業の効果と課題

－「書道研究Ⅰ」履修学生の振り返りコメントとレポートをもとに－

林 朝子

Effects and Issues of the Remote Class of Calligraphy

－Based on the Reflection Comments and Reports of Students Taking “Study of Calligraphy I”－

HAYAHSI Asako

要 旨

非対面で行った2021年度「書道研究Ⅰ」の実践から見えた非対面書道授業の効果と課題を報告する。履修学生の毎授業後の振り返りコメントとレポートを基に、非対面の効果と課題を探った。非対面のメリットとして、「課題に集中できる」「作品鑑賞の充実」が挙げられた。一方、デメリットとしては、「リアルタイムの指導が受けられない」「学生同士交流しながら課題に取り組むことができない」が挙げられた。書道という実技指導・学習を行っていく上で、対面でなければ対応できない部分も具体的に明らかとなった。対面、非対面のそれぞれのメリットを生かした書道授業の充実につながる示唆を得られた。

キーワード: 対面・非対面、書道、臨書、創作、鑑賞

1. はじめに

従来、大学授業の開講形態は対面が基本であったが、2020年の感染症拡大により、非対面授業が広く導入された。毛筆を使用する実技を含む書道の授業に関しても、非対面による実施が必須となり、授業内容の充実を確保するための工夫が求められた。当初は毛筆実技を指導する授業であるため、対面以外の授業形態を教員が想像しにくく、また、履修する学生も授業への取組方に戸惑いが見られた。教員・学生共、MoodleやZoomの使用にも不慣れな部分があり、それらの機能を十分に使用できない状態でのスタートであった。

今回取り上げる授業「書道研究Ⅰ」は2021年度後期に実施しており、教員・学生双方が非対面授業にかなり慣れてきた時期のものである。本稿では非対面で実施した(一部の学生は対面)「書道研究Ⅰ」での授業展開を報告し、学生の振り返りコメントとレポートに基づき、非対面による書道授業の効果と課題を明らかにしていく。

2. 非対面による書道授業実践

書道に関する授業の非対面実践報告としては、

廣瀬(2020)、富山(2020)、森(2021)が挙げられる。

廣瀬(2020)では、2020年度に行われた書道関係の複数授業での取組が報告されている。Zoomを使った授業が展開されているが、まず、突然の非対面授業対応への教員・学生の困り感、また、困り感への具体的な対応が報告されている。実際の授業では、理論面、作品鑑賞において、非対面でも十分な効果が見られたとしている。さらに、毛筆実技の習得を目指す動画では、作成時の撮影角度の工夫が重要であるという点を指摘している。

富山(2020)は、毛筆実技指導が中心となる書道授業の実践を報告している。大学のポータルサイトも使用し、15回の授業の内7回を非対面で実施し、学生の振り返りから非対面の成果と課題を導いている。廣瀬(2020)と同様に、実技指導に資するための動画教材の作成の必要性を課題として挙げている。

森(2021)では、Teamsを使用した非対面授業の報告がなされており、毛筆範書の撮影角度の工夫が述べられている。また、書道授業を充実させるため、書道字典や筆順字典などの利便性のある

* 三重大大学教育学部

アプリケーション等の ICT 活用の有効性についても報告している。

これらの報告から、毛筆実技指導の際には、実技動画、または、範書を学生に提示する際のカメラの位置や提示の工夫に取り組む必要があることがわかる。平面的な PC 画面上で学生が毛筆の動きを把握するには、同時に複数の角度からの撮影、提示が望ましい形であり、今後は更に動画や範書提示の工夫が必要とされるであろう。

3. 「書道研究Ⅰ」授業

3.1 授業概要

2021 年度「書道研究Ⅰ」は Zoom を使用した非対面（同時双方型）であり、Moodle も併用した。学生は 14 名であり、2 年生 5 名、3 年生 7 名、4 年生 2 名である。全員、毛筆実技に必要な基礎力を身に付ける授業¹⁾を既に履修済である。実際の受講は、10 名が非対面、3 名が対面、1 名が対面・非対面で受講した。対面受講の学生も常に Zoom につなぎ、学生全員が Zoom でつながるようにした。

3.2 授業内容

「書道研究Ⅰ」では、次の 3 点を学習目標とし、授業内容を設定した。

- 1) 書の学び方を知り、自律的に学ぶ力を身に付ける。書論の講読も行いながら、具体的な古典の臨書を行い、毛筆表現力の向上を目指す。
- 2) 様々な表現方法を言葉で説明できる力を身に付ける。
- 3) 運筆力を高め、創作活動を行う。

3.1 で述べたように、学生は既に楷書の基本点画の運筆など毛筆基礎力は身に付けていることが前提であり、それを基盤にさらに運筆の幅、表現力を広げることを目指した。

臨書作品や創作作品は授業の最後に Zoom カメラをオンにし、作品を全員が見られる状態にして、自分で頑張った点、難しかった点や次回頑張りたい点について簡潔に話し、全員で共有する時間を設けた。

また、授業後には毎時振り返りコメントを Moodle に提出するようにし、理解できたことや疑問点、また、自身の作品についての説明等、書表現に関する内容を言葉で説明する力を伸ばすことを意識した。コメントに対しては、次の授業の際にクラス全体に FB を行った。

臨書作品や創作作品については、写真を Moodle に提出するよう伝え、写真を見て、教員が各学生

にメールで FB を行った。内容によっては、クラス全体での FB も行った。

表 1 2021 年度「書道研究Ⅰ」授業内容

回	内容
1	オリエンテーション、アンケート
2	書論『書譜』講読、書の学び方①
3	書の学び方②－臨書の方法、古典紹介－
4	楷書①
5	楷書②
6	楷書③
7	楷書④
8	行草書①
9	行草書②
10	行草書③
11	行草書④
12	創作①－原稿作り－
13	創作②
14	創作③
15	創作作品発表・鑑賞

楷書、行草書の臨書古典は教員が提示した中から学生が選択。
授業終了前 15 分～20 分を使用し、学生全員が臨書作品をカメラに映しながら説明。

受講者全員がカメラに創作作品を映しながら説明。

第 4 回～7 回の楷書臨書で取り上げた古典は、『九成宮醴泉銘』6 名、『孔子廟堂碑』5 名、『雁塔聖教序』1 名、『多宝塔碑』1 名、『張猛龍碑』1 名である。また、第 8～11 回の行草書臨書で取り上げた古典は、『蘭亭序』10 名、『風信帖』2 名、『集王聖教序』1 名、『書譜』1 名である。

この授業では自律的に学ぶ力を身に付けるために、教員の範書を先に見せるのではなく、まずは自分で古典を十分に観察し、どのような運筆から生まれた点画なのかを考えながら臨書を行うこととした。教員は、授業内での作品説明、振り返りコメント、作品写真を見て、課題となる運筆

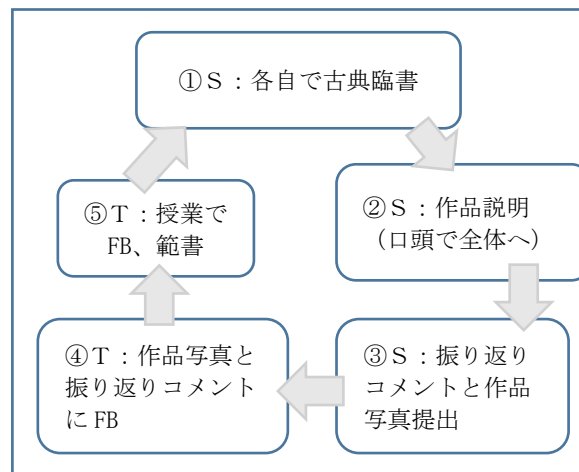


図 1 授業の流れ

を次週に範書として提示した。

授業は図1のように、①個人での臨書や創作活動を行い、②授業最後に作品を見せながら口頭で説明をし、③教員に作品写真と記述した振り返りコメントを送り、④教員が各学生にFBを行い、⑤授業で教員が各学生の作品やコメントに基づきFBと範書を行うという流れを繰り返した。

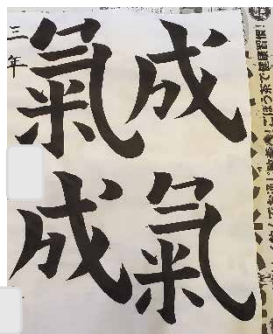
3. 振り返りコメントから見る学生の学び

3.1 古典臨書

楷書臨書を4回、行書臨書を4回行った際の振り返りコメントから、学生がどのような学びができていたのかを見ていきたい。

まず、楷書臨書の振り返りコメントからわかる学びである。例として学生A～Cの振り返りコメントを取り上げる。

【学生A楷書②『九成宮醴泉銘』】



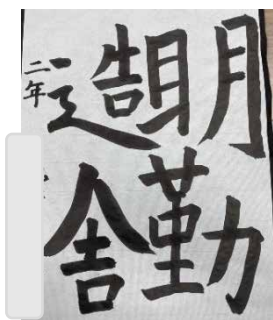
頑張った点：「成」や

「氣」の字にあるそりを意識したいと思い、この二文字を練習した。前回の先生のコメントで太さに緩急をつけることを指摘されたので、今回はそれが出るようにできたと思う。また、三画目までをコンパクトに収めることもできたと思う。

難しかった点・次回頑張りたい点：「氣」の字は、「メ」に当たる部分が「米」になっており、バランスを取るのが難しかった。もう少し横画の重心を高くして、パーツが離れないようにしたいと思った。

点画の太さの緩急の表現を課題として取り上げ、練習に取り組んでいる様子が見られる。また、表記が現在と異なる漢字の字形を捉えることの難しさにも意識が向けられている。

【学生B楷書③『孔子廟堂碑』】



頑張った点：「明」は、偏と旁が離れていたの、そこを意識した。「勤」は、偏と旁の高低差が目立っていたので、普通の字とは差がでるようにした。「舎」は上下にずれがあったので、そこを表せるようにした。

難しかった点・次回頑張りたい点：しんによる初めて書いて、のびのびとした字を書くのが難しかった。

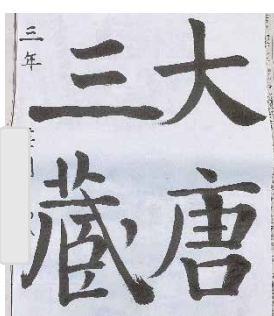
細かいところを表すために、細い画で書くのも難しか

った。終筆をもっと丁寧にやわらかく書けるようにしたい。

学生Bは上下、左右の組み合わせに着目し字形を意識しながら臨書を行っている。いくつかの部分から構成される漢字の場合、様々な配置による構成で変化に富んだ字形を生み出しており、その点を表現しようとする姿勢が見られる。

また、楷書で『孔子廟堂碑』の臨書に取り組んだ学生5名のコメントでは、『孔子廟堂碑』の特徴である蔵鋒²⁾の運筆について、自分なりの表現で説明ができていた。例えば「穂先を丸めることを意識した」「穂先を隠そうとして勢い余って墨溜まりができてしまったり、丸めきれなくて始筆がとがってしまったりした」「穂先をしまう」等、それぞれに工夫のある表現がなされていた。

【学生C楷書③『雁塔聖教序』】



頑張った点：前回の課題であった線の細い・太いのメリハリをつけることと、

「大」の3画目の払いの形を上手く書けるようにがんばった。「唐」の2画目の線の細さや「三」の横画の太さの揺れの表現は、前回に比べると納得のいく線を書くことができた。また、

「三」と「蔵」を大きめに書いてしまうくせがあったので、できるだけコンパクトにまとまるように頑張った。難しかった点・次回頑張りたい点：線に意識を置いて書いた分、字の大きさや位置のバランスが崩れてしまった。細かい部分に意識をしつつ、全体を見ながら各々のことを意識して次回は臨みたい。全体的に右上がりの線がまっすぐになってしまったので、次回は頑張りたい。今回は前回と同じ字を練習したため、次回は違う字にも挑戦したい。

『雁塔聖教序』は楷書の中でも点画の変化が多く、表現が難しい古典である。学生Cは同じ4文字を2週にわたって臨書をし、点画の細かな運筆力を身に付けようと取り組んでいる様子が見られる。

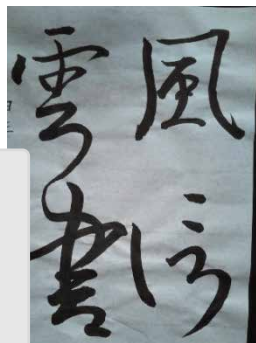
楷書古典のそれぞれの特徴を自分で発見し、点画を書くための運筆を探りながら練習していることが読み取れる。

学生Aと学生Cのコメントでは「バランス」という語が用いられている。非常に使いやすい語であるが、様々な要素を漠然と含む語であり、細かい点を言葉で表現することができない。授業では

書表現や運筆を言葉で的確に表現できる力を身に付けることを目指しているため、「バランス」という語を使わず表現するよう指導していたが、学生Aや学生Cのように思わず使用してしまっている様子が他の学生にも見られる。

では、次に、行草書臨書の振り返りコメントを見ていく。例として、学生D～Fのコメントを取り上げる。

【学生D行草書③『風信帖』】

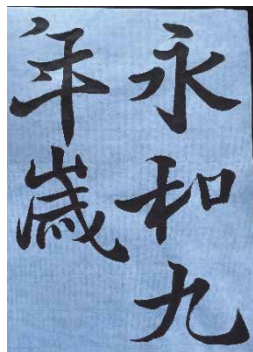


頑張った点：前回同様「雲書」の筆脈や流れを意識して書いた。前回よりもスムーズにかけている気がして嬉しい。また、書という字の横画のスペースができるだけ均等になるように意識した。「風」という字が古典のように上が細く下に向けて広がるという字形になるように意識した。「信」という字の一画目と最後の

の画の部分の線の太さの変化や終筆を意識した。
難しかった点・次回頑張りたい点：「書」という字の一番長い横画とそれ以外の横画とのスペースが広がりすぎないように思う。次回は書き始めの位置をもう少し上にするのを意識したい。また一番長い横画の太さが均一になってしまっていることも気になる。始筆からどう変わっているのかも一度よく見直したい。「風」という字がお手本のように上が細く下に向けて広がるという字形になるように意識したが、まだまだ真四角な字形になってしまっている。上を細く下を広く書くことが難しい。二画目をもっと右上がりを書くことを次回は意識したい。

学生Dは一画一画や字形をかなり意識して臨書している様子が見られる。「筆脈」「字形」「始筆」「終筆」「横画」といった書道用語を的確に用いながらコメントしており、それぞれの用語の理解もできていると言えるであろう。

【学生E行草書①『蘭亭序』】



頑張った点：筆先のS字の感じは、横画の始筆のくると回る筆使いで感じられたと思います。始筆が蘭亭序は独特で曲線的な感じがあったので、そこを表現できるように頑張りました。筆圧に関してはあまり自覚できていなかったのですが、「九」の2画目の折れてからはねるまで

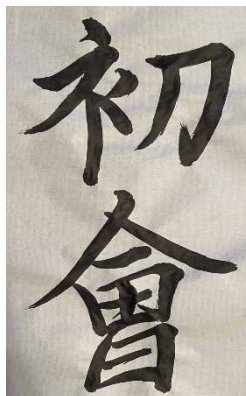
の流れや、「歳」の反りの部分でギュッと入ってスッと抜いたまま最後のほうまで流れて最後のはねでまたグッと力を入れる感じで少し感じられました。

難しかった点・次回頑張りたい点：筆圧がなかなか活かせられなかったので、次から表現として頑張りたい。

「和」や「年」など、次の点画につながる大胆な流れの部分の筆遣いがどこまで筆を抜けばよいのか？筆圧を弱めるのか？の具合が難しかったので何度も練習したのですが、なかなかうまくいかなかった。

楷書よりも行草書を書く際に多く活用される筆圧を意識している。穂先のS字の弾力を感じながら筆圧を体感している様子がうかがえる。様々な始筆の変化も古典から把握できており、実際に点画として表現することを試みている。また、筆の抜き方や筆圧のコントロールは課題として挙げられているが、それらが筆の表現にとって重要であることの理解は深まっている。

【学生F行草書②『蘭亭序』】



頑張った点：行書と楷書の違いが出せるように、墨を付け直す回数を意識的に減らした。その分掠れてしまう箇所が出てきたが、流れは出せるように思えた。お手本の中から筆脈を捉えて、次に行くイメージをしながら書かなければならないと思った。

難しかった点・次回頑張りたい点：墨をつける回数を減らしたことで掠れが多くなって

しまったが、古典では墨がしっかりついているようにも見え、墨を付け直すタイミングの難しさを感じた。

行草書の流れ、勢いを意識しているコメントである。墨継ぎを減らすことで、筆の流れを止めずに継続できることが体験できている。また、点画から点画への筆脈にも触れられており、行草書の臨書は、楷書より点画のつながりを感じやすいようである。

行草書臨書のコメントでは、全体的に点画や字と字のつながり、筆圧といった、行草書の特徴的な内容に関するものが多く見られた。「筆脈を意識しなければ行書らしさがなくなってしまうと思ったので、次の画への意識を図りながら書いた」「古典に筆圧の変容が大きく見られた」など、行草書臨書では楷書よりもさらに運筆の流れを感じ、点画の変化を意識できていた。

3.2 創作

第12～13回の授業で創作を行った。第12回に作品原稿を作成し、第13回・14回で実際の創作に取り掛かった。文言は自由に選び、書体は楷書か行草書を使用することとした。

3.2.1 原稿作成

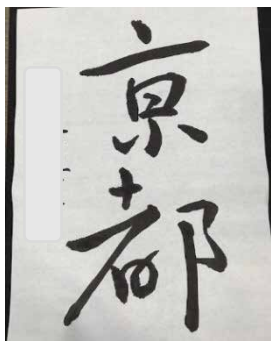
書きたい文言を決め、字書³⁾を使用し、原稿作成を行った。字書の使用は、大学の他の書道授業で使用したことのある学生以外は初めての経験であり、1つの漢字に様々な書体や表現があることに驚いていた。

原稿作成では、最初から大筆で書くのではなく、鉛筆か小筆を使用するよう指導した。学生のコメントには「筆で書く時より鉛筆の方が線の細さや太さを出すことができないからなのか、いつもより字形に着目することができた。しかし、筆で書いてみないと文字同士のつながりを感じづらいと思った」「筆圧を感じやすい濃いめの鉛筆で書いてみた。普段から使い慣れた筆記具のため、字の大きさや形はとても捉えやすく書きやすかった」「筆を持ったときよりも何度もやり直しができるという安心感から、余裕を持って考えることができた」といった、鉛筆で書くことによる字形把握のしやすさ、また、鉛筆と筆の表現の違いに気付いている様子が見られた。

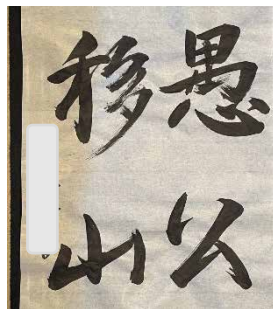
原稿作成については、「それぞれの字体の特徴でいろいろな雰囲気を感じられて、選ぶのが面白かった」「自分の好きな言葉で好きなデザインができるのはとても楽しいと感じた」のように自由に作品を考える楽しさを感じていたり、一方で、「字書に多くの字が挙げられていて、どれを選ぶのか迷った」「字の統一感を出すためにアレンジした」「同じ字でも選択する字の形によって全くイメージが変わるため、なかなか最終決定するのが難しかった」といったコメントにあるように、字書で多くの字を見て参考にする難しさを感じている様子も見られた。

3.2.2 創作

創作へのコメントでは、まず、書の表現の工夫が非常に詳しく書けている学生が多かった。運筆や字形に関わるものだけでなく、配置について触れられているコメントも見られた。例えば、「メインとなる二文字の配置と文字の大きさ、空白の空け方などのレ



アウトに関することをいつも以上に気に書いた(学生G「京都」)」等である。



また、創作での「かすれ」を表現の一つであることを感じている様子も見られた。「かすれさえも味を出すための要素の一つになり得るということを実感できた(学生H「愚公移山」)」、「かすれについて、ただ字を書くだけ

ではなく、草書ならではの筆の運びを生かしてかすれを出せたのがよかった」等である。

表現の広がりについても感じ取れているコメントも見られた。例えば、「今回は平安時代の行草体を参考にして書きましたが、中国の草書体を見ながら書くと、また違った雰囲気の作品になり、行草体ではなく、楷書で書いてみた場合でも、始筆の入る角度や筆脈が異なってくるため、全く異なる印象を生み出すことができるのではないかと

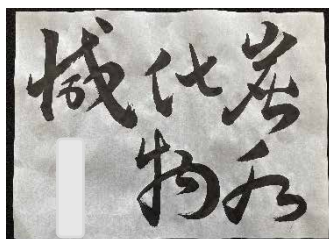


と思いました(学生I「北斗」)」、「「炭水化物減」という少し滑稽な熟語が行草書で表現することがかっこよくなり、字体を

変えることで文字から受ける印象が大きく変わ

ることを実感し驚いた(学生J「炭水化物減」)」等である。

さらに、集中して創作に向き合い、自主的、主体的に書に向かう様子も確認



できた。「自分で選んだ字なので、いつもより主体的に作品作りをすることができた」「何枚も練習をしていく中でどこをどう直せばよいか不明確で分からないという点では難しく感じたが、自分がじっくりく字を書くまで探究し続けるというのはとても新鮮な活動だった」「線の強弱や文字の構成といった部分に意識を向け、何度も書き直しながら作品と向き合ったことで、書を書くことに対する姿勢を学び取ることができたように思う」等のコメントである。

4. レポートから見る非対面授業

学生のレポートで非対面授業に関して記され

ている部分から、非対面による授業を履修した学生がどのように感じていたのかをメリット・デメリットの視点から見ていく。非対面履修 10 名、対面履修 3 名、対面・非対面履修 1 名である。学生の通信環境については、2 名ほどが一時的につながりにくくなる場合があったが、概ね問題なく授業を履修できていた。

多く見られたのが「学習環境」に関わるコメントである。非対面のメリットとして最も多かったのが「課題に集中できる」という内容で、7 名から挙げられていた。

- ・家で授業を受けていたため、落ち着いた環境でじっくり集中して作品づくりに取り組むことができた
- ・周りを気にせず集中して活動に取り組むことができた
- ・自分のペースで、自分で納得のいくまで練習ができる場所がよかった

周りの学生の書く様子、片づける音や話し声なども気にせず、課題に集中し、練習に取り組んでいた様子が見える。一方で、「リアルタイムでの指導が受けられない」「他の学生の書く様子がわからない」といったデメリットも 9 名の学生が挙げている。「リアルタイムで指導が受けられない」ことについては下記のコメントが挙げられる。

- ・リアルタイムで指導が受けられ、改善していくことができない
- ・書いている最中に指導が受けられない
- ・対面であれば、書く時の姿勢や筆の持ち方など、基本的な動作に関して見てもらうことができる

授業では、リアルタイムで質問等にも対応すると学生に伝えていたが、「音声で質問すると、他の学生に相談内容が聞かれてしまう」というコメントが見られた。他の学生に見られないチャット機能を使用し、質問等をしてくる学生は毎時 2, 3 名はいたが、実際に音声で指導を求めてきた学生は非常に少なかった。対面であれば、質問など教員へ自然に声をかけることが可能であるが、オンライン上では目立ち過ぎてしまい、声を出すことを躊躇していた学生もいたのであろう。

各学生へのコメント FB については、「何度も見返すことができ、毎回意識できた」「コメントで自分の改善点がわかり、次の練習に活かすことができた」など、教員からのコメントを有効活用している様子が見られたが、直接の指導を望んでいる学生もいることが明らかとなった。

「他の学生の書く様子がわからない」に関するコメントは以下となる。

- ・直接皆の作品を見ることができないのがさびしか

った。

- ・対面では作品対面では作品を見せ合ったりして意欲の向上や新たなアイデアを得ることができたが、オンラインで作品作りをしていた学生はあまりそういった交流ができなかったのではないかな。
- ・他の学生がいる中で書くことにより、沢山の刺激をもらえた。学生同士でお互いの字を見合うことにより、客観的な意見をもらえたりしたので、切磋琢磨できたと思います。

授業では最後に PC 画面上で作品交流を行っていたが、それについては次のようなメリットを記すコメントが多く見られた。

- ・画面を通して皆が同じ作品を観ることができた。
- ・オンラインでは他の人の作品が画面上で見られるため、対面の時のように「席の位置が遠いため見えにくい」といった状況が起きず、他の学生の書をよく観察できた。
- ・画面いっぱい作品が見られた。

このように、作品鑑賞の点ではメリットを感じている学生も多かった。廣瀬（2020）が述べているように、本実践でも作品鑑賞を非対面で行う有効性が示唆される。

以上、非対面授業に関しての学生のコメントを見てきたが、メリット・デメリット双方の視点からのコメントが挙げられていた。

5. 非対面書道授業の効果と課題

3. では学生の臨書・創作への振り返りコメントから学生の学びについて、4. ではレポートから非対面授業について、取り上げ、学生の学びの様子や非対面授業のメリット・デメリットをどのように受け止めているのか、確認を行った。それらを基に、今回の非対面書道授業の効果と課題についてまとめることとする。

まず、教育的効果についてである。毎時の振り返りや創作へのコメントから、学習目標である「毛筆表現力の向上」ができ、「言葉で説明できる力」を身に付けることができていた様子が見える。創作へのコメントに「お手本などを観ずに自分で創作する活動に取り組むことで、練習したことが少しずつであるが確実に自分の力になっていることを実感することができた」と記しているものがあり、毎時の学習の効果を創作で感じていることがわかる。また、毎回の作品説明の共有や振り返りコメントを繰り返すことにより、「自分の作品の頑張ったところや改善点を説明してきたので、言葉で説明する力もついた」と感じている学生もおり、書道表現を言葉で表現することにも効果が出せていたと言えるであろう。

課題として挙げられるのは、非対面授業でのリアルタイムでの対応や学生同士の交流である。リアルタイムでの対応を充実するためには、非対面でも学生から自由に発言できる雰囲気を作る必要があるであろう。授業では初対面の学生も多いため、グループ活動などを取り入れながら、非対面でも発言しやすい環境作りが重要と考える。しかし、指導面での対応では、学生の姿勢や筆の動きやリズムなどをカメラでは把握ができず、リアルタイムでの指導はほぼ対応が不可能である。教員から各学生へのコメント FB は何度も確認しながら練習に臨めるなどメリットは大きいですが、リアルタイムでの対応はできず、コメント FB だけで十分とは言えない。学生同士の交流でも、書かれた作品を鑑賞し合うことは可能であったが、作品が書かれていく過程を共有することはできていないという現状がある。順を追って作品を観ていく時間を設けるなどの工夫はできるが、実際の筆の動きを学生同士が共有するには対面が望ましいと言えるであろう。

以上、非対面書道授業を通して、非対面の効果と課題を見ることができた。教育的効果が見られた部分は今後も継続し使用しながら、更に工夫を重ねていきたい。一方で、書道という実技指導・学習を行っていく上で、対面でなければ対応できない部分も具体的に明らかとなった。

対面、非対面による書道授業の学習効果について、引き続き、実践的な研究を続けていきたい。

用語辞典』第一法規出版

森哲之（2021）「書写書道の実技指導に関する同時双方型オンライン授業の実践と ICT 活用」『広島文教教育』Vol.36、pp.101－105

注

- 1) 楷書を扱う「書道Ⅰ」が挙げられる。「書道Ⅰ」では、小中学校書写で扱う楷書から古典楷書までの運筆を取り上げている。
- 2) 藏鋒とは、始筆の際、穂先を点画の中におさめかくすようにして運筆することであり、丸みが帯びた点画となる。（参照：『書写・書道用語辞典』）
- 3) 字書は『大書源』（二玄社）DVD 版を使用し、授業内で文字の検索を可能にした。

引用文献

- 富山敦史（2020）「教員養成課程における毛筆書写実技の指導—楷書の実技を向上させる基本ポイント—」『教育研究実践報告誌』第4巻第1号 pp.9－18
- 廣瀬裕之（2020）「Zoom を用いた書写書道に関するオンライン授業の実践—新型コロナウイルス感染症流行時における本学での取り組み—」『書写書道教育研究』第35号、pp.71－76
- 藤原宏・加藤達成・永田作治・堀江知彦（1978）『書写・書道